

中野孝次先生の生き方

高橋 一 清

平成十六年七月十六日に逝かれた

中野孝次先生は、生前に「死に際しての処置」を記しておられた。文学者として信念を通す生き方は、死において同様で、臨終にあたって秀夫人のなすべきことが書き示されていた。中野先生に、「その時は君にすべてをお願いする」と申し渡されていたが、書面にそれが墨書されているのを見て、私は肅然として襟を正した。

中野先生の指示通り密葬、浄運寺にて葬儀の後、かねてより築かれていた墓に納骨した。

「死に際しての処置」は、十二項の簡条書きで、さらに五十年を共に過ごした夫人への謝辞が付記されていた。これは中野先生の死生観を率直に表し、今日の日本人にいかんにか生きるかを考えるに示唆に富むものと同じ、私が編集人を勤める文藝春秋臨時増刊「和の心 日本之美」に掲載させていただいた。そのうちの八項を、ここに紹介する。

「医師により死が確認せられたる時は、近親者と別に指名せる編集者のみこれを知らせ、それ以外の者に

知らせる勿れ」

「密葬に必要なかぎり葬儀屋に依頼すべきも、葬儀屋の言う通りにすべからず」

「湯かたびらの如き、草履、脚絆の如きは一切用うべからず、海島綿の下着をつけ、平常好んで着たるシャツに、ズボン、上着を着せ、生ける時の如くすべし」

「死体の処置を近親者に限るは第三者に死顔を見せざる為也」

「飾りなき車にて棺を運び茶毘に付すべし」

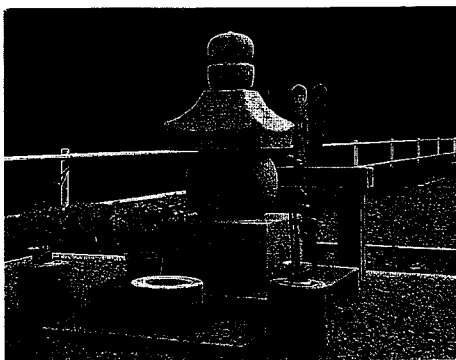
「骨を信州須坂浄運寺に運び小林覺雄和尚により簡素なる葬式を行うこと。このことは新聞紙上に公表して可也 来る人がくればよし」

「死後『お別れの会』の如きはすべからず」

「死はさしたる事柄に非ず 生の時は生あるのみ、死のときは死あるのみ、悲しむべきことに非ざるが故に」

中野先生は著書「清貧の思想」などいかにがえるように、日本人が本来持ち合わせた実生活に貫かれた謙虚さや節度、また生活の規範を説

き、簡素な暮らしの中で心の豊かさを求めた文学者であった。私は三十年近い歳月を、中野先生の担当編集者として過ごし、「ハラスのいた日々」をはじめ、何冊もの本を作った。その間に、国学院大学教授の勤めを辞め、文筆生活に入られた。そして一度ならず二度も、私のふるさと山陰への旅のお供をしたが、先生の考え方、生き方の姿勢に変わりは



中野孝次氏の墓

なかつた。

仰々しい葬式やお別れ会などするな、と書かれた中野先生だが、十二項の最後には次のように記しておられる。

「小林和尚が浄土宗の流儀にて葬儀を行うは、それに従うべし」

いつの頃からか、日本の知識人、とりわけ文筆家、ジャーナリズムに

たずさわる人々の中には、無宗教者や無神論者を標榜する風潮が生まれ、今日に至っている。そもそも八百万の神のいる日本のような汎神論的世界では、ことさら神や仏をいう必要はないほど、そのお蔭を心にとどめている、という考えもあるが、実は今日の風潮は、文字通り神のない世界で、神仏の加護をまったく意識にとどめない。実際、作家や言論人の葬儀では読経も焼香もなく、中には葬式もしないで済ませることもある。

これを科学的合理主義というのだが、目にもみえない、心にしか感じ取れないもののあることを解かろうとせず、畏怖の念を持たず、偉大なものへの敬虔な態度を忘れたところから、人間の横暴な振る舞いが始まった。これはひいては、地球上に共に生きたものを破滅へと追い込むこととなる。

中野先生は、奢ることのない、知って知って、なお神祕を知る人であった。死に際し、僧侶のおつとめの意義とその大切さを従うべきものと書かれている、この一般の人と同じ素直な生活意識があったからこそ、地道に生きる中高年の人々が、中野先生の書かれる文章に厚い信頼を寄せたのだと、私は思うのである。

(前文藝春秋編集者)